

ドミニカ日本移民の語り  
- 神奈川県愛川町の日系ディアスポラ -  
Narratives of Japanese Emigrants to the Dominican Republic:  
Japanese Diaspora in Aikawa Town in Kanagawa Prefecture

森川 洋子 (明治大学大学院博士後期課程)  
MORIKAWA Yoko (Meiji University)

【キーワード】 ドミニカ日本移民、他者、ライフストーリー

本発表は、ドミニカ共和国 (以下ドミニカ) から日本に来た日系人の「人生の軌跡 (ライフコース)」を事例に、国家による移民政策や社会変動が彼ら／彼女らに何を及ぼしたか、そして国家間の枠組みを超えた新たなアイデンティティがどのように形成されているかを考察する。ドミニカへの移民については、彼ら／彼女らが損害賠償を国に求めたことで注目されたため、これまでの研究は国家の政策と責任に関する問題に集中しがちで、本人たちの思いは訴訟に限られたものしか取り上げられず、ドミニカからデカセギに来ている状況はほとんど知られていない。そこで本研究では、2018年現在神奈川県愛川町に在住する彼ら／彼女らの語り(narrative)から、日本からドミニカへ、そしてドミニカから日本へと移住を繰り返すプロセスと、その中でアイデンティティの「揺らぎ」を明らかにする。

第二次世界大戦後の日本は、旧満州や朝鮮半島、パラオ等からの引揚者と失業者であふれていた。政府は開拓政策を打ち出し、引揚者・復員兵・戦争罹災者が充当された。戦後の移住政策は、人口問題解決の基本方針として、移民受入国があればどこへでも日本人を送り込んだ。ドミニカ移民募集は、誇大広告的なものが多く「300 タレア (約 18 ヘクタール) の土地無償譲渡」という夢のような条項が記されていた。1956～1959年の間、249家族 1319人が移住したが、入植地は三分の一以下の面積で所有権ではなく耕作権のみ、塩が吹く砂地、灌漑設備もなく岩石が転がる農作不能な土地であった。

1961年5月、日本移民受け入れに積極的だったトルヒーリョ大統領が暗殺され、国内は内乱状態になり日本人に対する略奪も起きた。日本政府は、「国援法」によりドミニカ日本移民の集団帰国を決定して、1961年10月から1962年までに133家族が集団帰国をした。残り69家族が、アルゼンチンやブラジルなど南米へ渡ったが、47家族276人はドミニカに残留した。2000年7月に、1319人のうち126人は、日本政府を相手取り損害賠償を求め東京地裁に提訴したが、一審判決で国の不法行為は認定されたが、時効により損害賠償の請求権は棄却された。その後、控訴審において和解案が提示され、特別一時金の支払い、小泉首相からの謝罪、ドミニカの日本社会への支援などで合意に至った。

調査対象者として、帰国か残留か南米へ転住かの選択を迫られた時に、ドミニカに残留を決意してドミニカ国内を8カ所以上転々とした北海道門別出身の家族を中心にする。1990年の入管法改正以降、ドミニカに残留した二世、三世を中心に日本へのデカセギが始まった。日本政府の移民推奨により満蒙開拓団、終戦後の引き揚げと北海道開拓村、そしてドミニカ移住と、戦前・戦後を通して二度も日本政府による国策移民を経験し翻弄され続けたとは、なんと厳しい人生であろうか。ドミニカ移民現地調査団による実態調査によれば、調査対象の移民の6.9%が「大陸からの引揚者で、日本在住の土地がないため」ドミニカに移住したと回答していた(ドミニカ移民現地調査団 1992:57)。

調査対象地域として、神奈川県愛川町とする。愛川町は神奈川県中央北部に位置し、山と川に囲まれた自然豊かな町である。愛川町は外国籍住民の比率が高く、日本で一番ドミニカ人が多い町である。2017年1月1日現在、総人口40,955人のうち外国人2,291人で、出身国をみてもペルー670人、ブ

ラジル 469 人、フィリピン 321 人、タイ 101 人、ドミニカ 57 人、中国 195 人、その他インドネシア、カンボジアと多彩である。ドミニカ 57 人と報告されているが、実際は一世や帰化等で日本人になった「日本国籍取得者」を含むと 100 人を超える。外国籍住民が多い理由は、町の南部から厚木市にかけて広がる内陸工業団地にある。東名高速道路や中央自動車道、関越自動車道と直結し大型物流施設が建設され、製造業関連の工場など 139 社が進出している。

調査方法はアンケートと聞き取り調査を主軸に捉え、半構造化インタビューを主としている。日本語とスペイン語の言語能力については、一世は日本語を保持しているが書くことができない、スペイン語は話すことができるが書けない。二世の多くはドミニカ人との結婚が多く、スペイン語が中心となっている。そうした中で、日本語継承へ高い意識を持つ一世の父母や祖父母から日本語や日本文化への愛着が二世、三世に伝わっていることが本調査から明らかになった。二世の 20 代女性は、弟とはスペイン語で話しているが、日本人とは丁寧な日本語で話す。母親が非日系ドミニカ人であることを思うと不思議だったが、自宅の一室を日本語教室にして二世、三世に日本語を教えていた祖母の強い影響を受けている。「他人に迷惑をかけるな。自分なりに正々堂々と生きていけ。」祖母は、日本語と日本文化の大切さを教えてくれたと語る。

日本では、「空気を読む」ことや「状況を察する」ことが重要視されることから、言葉によるコミュニケーションが評価される欧米などのローコンテキスト文化と比較して、ハイコンテキスト文化であると言われる。学校でも地域社会でも、日本人の仲間 (peer) から有形無形の圧力 (pressure) を受ける。日本では、多数派の意見に合わせることを強制される同調圧力ピア・プレッシャー (peer pressure) あるいは同質化圧力は半端ではない。日本語があまり話せない日系ドミニカ人には、それは無言の威圧感となっている。何事も心にしまって本音を言わない日本人に対して窮屈さを感じている。

本研究では、日系ドミニカ人のマージナル性を折原の議論を参照に検証する (折原：1969:249)。日本で外国人として見られる中で、ドミニカ人としてのアイデンティティを自覚する。日系ドミニカ人は、ドミニカ社会と日本社会の二つの異質な社会圏の境域に立って、それぞれに属する他者、つまりドミニカ社会では日系人としての意識、日本社会ではドミニカ人としての意識からライフスタイルや言語文化に自分を映し、他者の「まなざし」を通して自分を見ることで二重の自己が形成され、両者が異質で対立しているから二重の自己は内部で葛藤をおこしている。さまざまな状況に遭遇して揺らぎが繰り返されている。「楽しいことも嬉しいこともたくさんあるが、つらいことの方が多い。それでも人生は面白い。」と語る。彼女ら／彼らの揺らぎは、必然的なアイデンティティの揺らぎであり、決してネガティブなものではなく「自由」の別名なのだ。

#### 【参考文献】

- ・折原浩, 1966 年『危機における人間と学問—マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』 未来社
- ・今野敏彦・高橋幸春編, 1993 年『ドミニカ移民は棄民だった』 明石書店
- ・桜井厚・小林多寿子編著, 2013 年『ライフストーリーインタビュー質的研究入門』 セリカ書房
- ・ドミニカ移住 25 周年記念行事執行委員会, 1981 年『カリブの島の拓人たち』
- ・ドミニカ共和国日本人移住 50 周年記念祭執行委員会, 2007 年『今、生きてここに在る』
- ・ドミニカ共和国日本人移住 50 周年記念祭執行委員会, 2009 年『青雲の翔』
- ・ドミニカ移民現地調査団編, 1992 年『ドミニカ移民実態調査報告書』 ドミニカ移民現地調査団